

おまけSS 叔父と甥、話し合う。

（先生と幸福なひととき。閑話）

※当おまけSSは本編十おまけ音声後のお話です。視聴後の閲覧を推奨致します。

長期休暇と言えど、出来の悪い生徒には補習授業があるわけで。

「…で、この部分が引っかけで…」

成績の悪さとは無縁の俺こと石流燕は、ていのいい教師代わりをさせられていた。

教師の「当分の間、君の着ている白衣のこと見逃してあげるから」という言葉に釣られた俺も俺だが。

参加者はクラスの五分の一程度の人数だ。学期末テストで赤点を取った人間が集められていた。

「あー違う、そこはそうじゃなくって」

さっき忠告したばかりなのに、思いつきり引っかけかかっている。

「だから、ここは…」

該当部分に赤いペンで印を付けて注意を引く。

「……」

目の前で気まずそうな顔をしている女子が一人。学期末テストの点数の悪さや、俺に指摘されているだけでこの顔ができるわけがない。

「……この前、お前がアイツの車に乗ってるところを見た」

「この前お前と叔父さんが一緒にいるのを見かけて、気になってだな」

つい先程、そんなことを言った相手に勉強を教えていた。

休み時間前は他のクラスメイトの勉強に付き合っていたんだが、特に成績の悪いコイツに付きつきりになることになってしまった。

「……露骨に嫌そうな顔すんなよ」

小声で言う。

「もしかして、俺の教え方が分かりにくいのか」

俺の問いにぶんぶんとう首を振る。だが、プリントの問題は一向に進まない。

「……分かった、もう一度説明するからよく聞いていてくれ」

(これが叔父さんの好きな子…ねえ)

なんというか…妙な気持ちになるというか、「へー叔父さんこういう女がタイプなのか」とか「年下が趣味なんだな」とか下世話なことをついつい考えてしまう。

補習授業も滞りなく終わり、生徒も帰っていく。俺も荷物をまとめて校門に向かう。ローファーを履き校門を出たところでふと思いつき、ケータイを胸ポケットから取り出して電話かける。二度コール音が鳴った後、すぐに繋がった。

「もしもし」

「んーあーはーい、もしもーし燕くん？」

間の抜けた声が返ってくる。昼寝でもしていたのだろうか、いつもよりのんびりとしたあくび混じりの声だ。

「今日叔父さんち行くから」

「…えっ確定事項？」

急な出来事に眠気が吹き飛んだのかいつもの調子に戻っている。

「まず僕の予定とか聞かないの…？」

「どうせ予定無いだろ」

「う……いやその通りですけど。というか、やけに必死だけどどうしたの？」

「……いいから！」

どうしてか、直接言っただけとはいけないような気がして俺はゴリ押しで会話を進めていた。

「何、もしかしてなんかあった？相談なら乗るけど」

「あぁっそんな感じだよ、とにかく行くからな！」

こっちがヤキモキしているなんて想像もつかないだろう。

「え、あ、気を付」

俺は叔父さんの返事を待たずに通話を終了した。

学校から徒歩二十分程のところに叔父さんの家はある。駅近、築浅、恐らく単身向けではないマンション……の一室が叔父さんの家だ。一般的な保健室の先生が住めるようなところではないはずだ。叔父の父……つまりは俺の祖父にあたる人が買い与えたのだろう。石流家は大病院を何代にも渡り経営しており、その上に立つ人間が息子を可愛がるためのはした金を持っていないはずがない。

仰いでマンションを見上げる。この辺りでは一番背の高いマンションだ。

マンションに近づくと、エントランスの自動ドア前に叔父さんが立っていることに気がつ

いた。いつから待っていたのだろう。

「やーやー」

にへら、と笑い俺に手を振る。

「別に迎えに来なくても」

「んー？入り方とか場所とか分かんないかなって」

「……」

年に数える程しか来ないため、正直分らないと言えば限りなくそうである。

「ここに来るの久しぶりだね？」

「ん……」

叔父さんがニコニコしながら人当たり良さそうに話してくる。それについぶっきらぼうな態度を取ってしまうのは何故なのだろう。

「燕くんが遊びに来るって言うからコンビニでシュークリームとかケーキとか買ってきたよー。好きなの食べなー」

右手に持ったコンビニの袋を揺らす。

「…叔父さん、甘いのが好きじゃないくせに」

「ん？」

「なんでもない」

この人は何かと人に甘い。きっと彼女にも尽くすタイプなのだろう、想像に難くない。

玄関までエスコートされ、目的地に到着する。

「いやーいつも通り何も無くてごめんねー」

「別に……ここに遊びに来たわけじゃないし」

「珍しく僕に電話なんてしてきたから、てっきりゲームしにきたのかと」

叔父さんがテレビの下のキャビネットから取り出したのは最新のゲーム機だった。

「相談事があるならこれしながら話そ？」

「う、あ……それは……！」

「燕くん前やりたいゲームがあるって言ってたじゃん？僕もやりたくてさーつい買っちゃった。コントローラーも二つあるよ？やる？」

「やるー！」

叔父さんは慣れた手付きでコントローラーを操作しゲームを起動する。このゲームはいわゆる格ゲーと言われているやつだ。

「燕くん操作慣れてないだろうし、ハンデ付けるから許してね」

「どうせハンデがあつて俺が操作に慣れたところで、叔父さんには勝てないっつーの……」

「まーその辺は年の功だよ」

年の功にしては妙にプレイが上手い。それこそ、実況プレイをして動画投稿したら人気が出そうな程に。

「叔父さんが前言った……うぐ……つ、昔はゲームやり込んでたんだった……！け……？」

俺は説明書を流し読みして覚えた操作方法を一度頭から捨て、ひたすらボタンを連打している横で叔父さんは涼しい顔をしながらかなれた手付きでボタンを押す。

「あー、大学受験する前の話ね。懐かしいなあ。そんなこと燕くんに話したっけか。もう十年以上前のことだよ」

あつという間に俺の動かしているキャラクターは地に伏せる。

「大学受験前、ストレスでゲーセンに行きまくってた話聞きたい？」

叔父さんは視線をテレビに向けたまま、真顔で俺に問う。

「だからそんなにゲーム上手いのかなって」

「上手くはないけどー。まー十代の現実逃避には持ってこいだっただんじやないかな」
チラッと叔父さんの顔を見ると……遠い目をしている。

「勉強が特別でできるわけでもない、人に言える趣味らしい趣味といえば読書くらいで。進学校で授業の進みも早くとつてもじゃないけど部活なんて入れなかったし…」

(ドンドン目が曇っていく…)

「僕もなんか、一つだけでもいいから誰かに勝てるのが欲しかったんだよね」

「まあ、気持ちは分からなくもないけど」

再戦。俺は続けて同じキャラを選び、叔父さんは別のキャラを使う。続けて同じキャラを使わない、という叔父さんなりのハンデの一つだ。

「格ゲーもやったし落ちゲーも音ゲーも、それこそクレーンゲームも一通りやったなあ。景品はクラスメイトにあげたり売ったりして、あー、そのお金でまたゲームしてたっけ」

「やべえ…」

想像以上に濃かった。

「おかげで第一志望落ちた！あつはつはつ！！」

「笑い事じゃ、ねえ〜…」

叔父さんの操作するキャラは軽やかな動きで俺のキャラの体力を削っていく。

「んー、いやまあそれなりにちゃんと勉強はしてたよ？サボリっていうよりかは、息抜きしないとメンタルが先にやられそうだったただけでさ。君もそういう逃げ口は持っておいた方

「がいいよ？」

「…はい」

あつという間に負けた。第一志望に落ちる程やり込んだゲームの腕前は確かなものだ。

「クラスメイトとかそれこそ彼女…とかと行ってたのか？ゲーセン」

本来の用事を思い出す。すっかりゲームに夢中になってしまっていた。話をそれとなく恋愛の方に寄せて行こう。

「いやいや、一人だよ。僕、仲の良い友達少なかったし、高校生の頃は彼女いなかったから」
「高校生の頃はって、彼女いたことあんの？」

叔父さんの浮いた話は実のところ聞いたことがない。結婚をする気配も、何なら誰かと交際している気配だって今まで無かった。だから、この前叔父さんとクラスの女子が仲良く車に乗っているとところを目撃して心底驚いてしまったのだ。

「まーそりゃー…」

おじさんの目がさつきより曇っている。しかしゲームをする手はそのままの速度を維持していた。

「もしかして、地雷踏んだか…？」

「んー地雷って言うか…。これは自慢じゃないけど…、僕は何とも思っていない状態で向こ

うから言い寄られて、別に断る理由もないから付き合っで、で、相手から見限られて振られるパターンが何回か……いや何回もあったねえ……」

「……はあ」

恋愛経験が少なく、モテるわけでもない俺としては遙か遠い宇宙の話聞かされているような気分になった。

「好きじゃないなら、最初から断ればよかったのに」

「んーんー……。僕としては、相手を傷つけたくない気持ち半分、付き合ったことよって好きになれるかも的な期待半分でいたんだけど……それが伝わっていたんだろうね。僕が相手のことを好きで付き合っでなかつたこと」

優しくて人に甘い、叔父さんらしい考えだ。

ゲーム終了。もちろん負けたのは俺だ。勝つてっこない。俺は叔父さんが買ってきたシュークリームを手を取って袋を開ける。叔父さんはコンビニのスイーツに手を付けず、インスタントコーヒーを淹れ始めた。

「そんなこんなで、この歳になつても結婚しなかつたってわけ！」

「今はそういう人増えてるらしいし、いいんじゃないか。無理しなくても」

「あは、僕個人としては結婚したい気持ちはあるんだけどねえ」

妻に気を配っている叔父さん。子供をあやしている叔父さん。いいお父さんをしている叔父さん。どれも想像できる。

「そういえば相談事？があるんだっけ。いいの？しなくて」

叔父さんはニコニコしていて何も変わりはない。いつも通りの叔父さんがそこにいた。

「お前、さあ……っ」

振り絞るように声を出す。

俺のクラスの女子と付き合ってるんだろ？

年の差考えろよ。

というか、俺のクラスの女子に手を出しておいて罪悪感とか無いのかよ？！

俺が気付いたら、なんて考えなかったのか……？

もしかして、相手からの告白が断れないからって危険を冒してまでなあなあな気持ちで付き合ってるわけじゃないだろうな？

叔父さんへの疑問が、責める言葉が、怒涛の如く押し寄せてくる。

でも。

「んー？」

優しげなまなじりを見ていたら、俺の中にある理不尽な怒りなんて消え失せてしまった。

「……トイレ！」

俺は頭に浮かんだ言葉と気持ちを誤魔化すように立つ。

「どーぞー、部屋出てすぐのー……って分かるか」

言い出すに言い出せなかった。

当のお相手ご本人様から聞いた言葉なら間違い無いはずだ。しかし、信じきれずにいたのは信憑性とやかくというよりあまり信じたくはなかったからだ。

叔父さんは、俺が生まれた時から面倒を見てくれていた人だ。血のつながりはないものの、信用とか、今まで築いてきた何かとか、それなりにあってもおかしくはないはずで。それこそ、今付き合っているであろう「彼女」よりも年月がある分重くてもいいはずだ。

できれば本人の口から聞きたかったのが本音だ。

なんとなく、本当になんとなくだったんだが。

「……」

トイレ横にある浴室のドアを開けてみる。これは女の勘ではなく甥の勘だった。

洗面台には歯ブラシが一つ、マウスウォッシュ、洗顔フォーム、くしなどなど、男が一通り身嗜みを整えるものが揃っていた。

「嫌な予感がしたけど、杞憂だったか」

これで歯ブラシが二つあったり、どう見ても女物の化粧品が置かれていたりしたら厭いな気持ちになりかねなかった。

「やってることが気持ち悪いな俺」

スツと冷静になる。こんなストーカー紛いのことなんてやめよう。これが叔父さんの新しい彼女とか、叔父さんを狙っている女ならまだしも。

(いや、それはそれで怖いが…)

踵を返す。叔父さんのいるリビングに戻ろうとし、自然と風呂場が目に入った。

「……は？」

男物の洗髪剤の横に、仲良く並ぶようにして女物のシャンプーとトリートメントが置かれていた。

「おかえりー、遅かったけどお腹でも壊した？」

叔父さんは俺に目をくれることなく一人でゲームをしていた。

「叔父さん、これ…」

「ん？……ギャー!？」

俺が手に持ってる物を見て、叔父さんの口から素っ頓狂な悲鳴が上がり、叔父さんが手に持っていたコントローラーが落下した。テレビ画面内ではキャラクターがステージの穴へと落ちていく。

「何、これ」

やっていることが完全に彼女とか妻とか、そんな感じだ。

「じゃ、シャンプーとトリートメント、たまに変えてみよーっかなーって！」

「すぐにバレル嘘をつくな」

「あー、あー……あ、あは、あはは」

叔父さんの乾いた笑い声が部屋に虚しく響いた。

「お前、俺のクラスの奴と付き合ってるんだろ」

「え!？な、な、なんで知ってるの…?」

経緯を説明すると、抜かったなあとため息をつきながら言い叔父さんはどうとう観念した。「浮気がバレた時ってこんな感じの気まずさなんだろうな…いや浮気するつもりもない

けどさ」

罰が悪そうに頭を掻き、目線を窓に向けた。

「も、もー！探偵さんだなあ燕くんは」

「んで、ここに既に連れ込んでたんだな」

「えー、あー、あは……」

取り付く島もないらしい。

「今日、お前の付き合ってる女と話してきた」

「……………へえ」

さも羨ましそうな、嫉妬混じりの表情をされても。そいつと連絡先を交換したなんて言ったらどんな反応をされるのか怖いので黙っておくことにしよう。

「俺、補習の手伝いしてたんだよ。たまたまあっちが来てたから」

補足しておかないと余計な恨みを買いきそうだった。

「横から取るつもりは毛頭無いし、別れるなんて言うつもりもない」

「あー、よかったー。取られるかと思った」

叔父さんはホッと胸を撫で下ろす。冗談で言っているのか区別が付かない。

「まあ、別れろって言われても別れないけどね」

あまりにあっけらかんとしているものだから、少しだけ苛立ってしまった。

「…お前、自分のやっつてることがヤバイことだって分かってるよな？」

「分かってる、分かってるよ」

「なら」

被せるように言う。危機感が無い、無さすぎる。

「さっき話したけど、今まで誰かに好きになってもらうことはあっても、僕から誰かを好きになっただけじゃないんだ」

「初めて人を好きになっちゃったんだから、もうどうしようもないよ」

叔父さんは力なくへらへらと笑った。

その言葉を聞いて俺は、なんだか脱力してしまって、叔父さんが買ってきたシュークリームにまた手を付けるのであった。